

平成27年度 第6回企画展（11月28日（土）～1月11日（月））

すぎえおうけん 「二代杉江滄軒」遺作展

二代杉江滄軒は本名を徳胤とくとねといい、代々製陶業にたずさわる初代杉江滄軒（本名は惣七そうしち）の長男として、大正8（1919）年に常滑の西阿野で生を受けました。

昭和10（1935）年に県立常滑陶器学校を卒業後、常滑工業高校に入学しました。当時の指導教官は平野霞裳かしょうの後任で、東京美術学校彫塑科を卒業した坂田芳信さかたよしのぶ（1907－1961）でした。坂田は在学時より帝展（帝国美術院展覧会）に入選する実力者であり、二代滄軒は在学中に彫塑の技術を磨きました。その実力は、昭和13（1938）年の卒業記念制作で作った彫塑「鳩」が名古屋市民展で入選しました。

同校を卒業後、商工省の大阪工業試験所に入所しますが、やがて戦争が激しくなると、兵役を受け戦地へ赴くことになりました。

戦後は地元の常滑に戻ることになり、父初代杉江滄軒（1881－1963）に師事し、陶彫と手捻り急須の制作技術を学びます。杉江家が受け継いできた手捻り急須の技術は江戸時代から明治時代に活躍した常滑の名工、初代杉江寿門（1826－1897）にまで遡ることができます。

昭和24（1949）年には株式会社七本松製陶所の設立に伴って社長に就任すると、精細な動物のノベルティを制作し、主に輸出陶磁器の事業を展開しました。

社長退任後は、大量生産ではない手捻り急須制作に力を注ぐようになり、その手捻り技術が国に認められ、昭和51（1976）年に通商産業省（現在の経済産業省）の伝統工芸士の認定を受け、昭和54（1979）年にとこなめ焼伝統工芸士会初代会長に就任しました。

伝統工芸士とは、産地固有の伝統技術の保存や技術・技法を磨き、次の世代に伝える責務を担っており、自分が受け継いだ技術を伝えるという責任感もあり、二代滄軒を襲名しました。それは初代が亡くなって17年後のことでした。

昭和50年代後半から60年代にかけて、全国伝統工芸士会幹事として後進の育成に励む中で、東海地方の各地で個展を開催するなど精力的に活躍をしました。

また、急須・置物彫刻を中心に花器や抹茶器など幅広く作陶をおこない、平成12（2000）年に開催された第29回長三賞陶業展では最高賞の長三金賞を受賞しました。二代滄軒の作陶活動は平成27年2月（96歳）にその生涯を閉じるまで続けられました。



達磨大師立像



朱泥鐘形手捻り急須



灰釉竹形花器